

嘗てのビルマ戦線で戦った 日本将兵を想う

— その 8 —

アジア解放と陸軍中野学校

高 松 重 信 ・ 著



ビルマ幹部候補生隊を訓練する陸軍中野学校出身の日本将兵



日緬ライブラリー・パダウ

PADAUK

前文 ／ 先の大戦中ビルマ戦線で戦った日本将兵の本義（人生観）

（一社）日本ミャンマー友好協会・副会長 高松重信

戦争とは人類が最も忌避すべき残虐な事変である。従って我々は最大限の努力をもって、その戦争を回避しなければならない。

しかしながら、世界の歴史に於いて戦火が絶えることはない。現状下に於いてはイスラエル・パレスティナ紛争、ロシア・ウクライナ戦争などと悲惨な戦いで多くの人命が失われている。また、中国と台湾、南シナ海、中近東などの地域では一触即発の危険性を孕んでいる。

プロイセンの将軍カール・フォン・クラウゼヴィッツは「戦争」を自身の著書「戦争論（Vom Kriege）」の中で次の様に定義付けている。

「戦争とは、敵を強制してわれわれの意志を遂行させるために用いられる暴力行為である」
即ち、双方が武器を有した暴力行為であるから、双方の将兵及び市民に人的損傷が必ず生ずることになる。

特に戦う将兵にとっては必ず自らの人命を投げ出す覚悟をしなければならない。つまり人間にとっては誠に苦しい状況下に於かれるから、一人一人の将兵にとっては極めて赤裸々な個人的な人間像を呈することになる。

我が国の国策により先の大戦中、遠い異国のビルマ戦線に派遣された日本将兵方々が過酷な戦いの中で、如何なる生き方を示していたかを我々日本人は知り、畏敬の念を払うと同時に、我々が今後進むべき人生観の道標にすべきと思う次第である。

他方、第二次大戦は確かに、我国はアジア諸国を中心にして、その惨禍を被らせたことにお詫びと反省をしなければならない。二度と我々日本人は過ちを犯してはならないことを肝に銘じ、今後の我が国の若人に申し伝えねばならない。

しかし、自虐的な書物及び報道によって、第二次大戦に対して日本が果たした世界史的な役割も、また見失ってはならない。私は、平和共存を前提にして、いま、この旗を建てるため、我々日本人が如何なる働きをしたかを聞かされるならば、我が民族は必ずや、再び、失われた自信を取戻し、胸を張って、新しい人類の理想のために前進するのではないかと思う。

当一般社団法人日本ミャンマー友好協会は、1970年、ビルマ戦線から帰国された方々が設立した団体である。先の大戦中、ビルマには約30万人の日本将兵方々が派遣され、遠い彼の地で日本の両親兄弟及び人々の為に渾身の力を絞り勇戦されたが、戦い利にあらず、その内の約18万人の方々が戦病死され、未だその遺骨の多くは帰還されていない。我々は彼らに対して感謝もせず、慰霊もせず、ただ忘れるばかりの日本人であって良いのだろうかと思うことしばしばである。

この意味も含めて、日本将兵方々が、あの過酷なビルマ戦線で如何に戦われたかを我々は知り、それらの人々の遺功に報じなければならないと思う次第です。

以上の観点で、（一社）日本ミャンマー友好協会の「日緬ライブラリー・パダウ」に先の大戦中ビルマ戦線で戦った日本将兵の本義（人生観）と題して、拙文を登録させて頂いた次第である。

登録させて頂いた拙文は戦記的な興味本位でなく、悲惨な戦場で戦った日本将兵の本義（人生観）と言う角度で記述致している。読者の方々に於かれては是非とも一読して頂き、些少とも御参考に為りますれば、幸甚に存じます。



1. はじめに

第二次大戦で世界的に大きく変わったことがある。その一つがアジア民族の独立であった。大戦前のアジアで真の独立国は日本のみであった。

※タイも独立国ではあったが、植民地に近い状態であった。

当時の世界は帝国主義の弱肉強食であり、アジア各国の民衆は虐げられた植民地の悲哀と苦境の中で生活を強いられていた。時には民族独立の機運となる運動もあったが、宗主国によって固く封印され抑圧されていた。この様な中で、民族の独立の旗を立て、この大義を貫いた人々を助けた日本人達がいた。彼ら日本の若者たちは過ぎし時代に、戦争という過酷な中で、インド、ミャンマー、インドネシアなどの若人と力を合わせ、若い情熱を燃やし、独立の理想に向って、突き進んで行ったのである。この若い日本人の中心に陸軍中野学校の卒業生達がいた。

当時、我が国が世界に向かって布告した「大東亜共栄圏」を日本の為政者達がプロパガンダとして用いたのと異なって、彼ら日本の若人は真にそれを大義と受け止め情熱を持ってその実現に突き進んだのである。

※「大東亜共栄圏」とは；「Greater East Asia Co-prosperity Sphere＝植民地を解放し共存共栄の国際秩序の建設」

この共栄圏構想は現下の我が国では忘却されているか又は自虐的に軍国主義の遺物として扱われているが、現在の我が国の外交方針及び次の国連の目的にも近似している。即ち、

- 1) 国際平和及び安全を維持し、人民の同権及び自決の原則の尊重に基礎をおく諸国間の友好関係の発展
 - 2) 経済的、社会的、文化的または人道的性質を有する国際問題を解決すること等。
- つまり、その構想は、我々が海外支援及び海外での活動を行う場合、その究極的な目的、簡約すれば、相手国を尊重し発展に貢献し共生増進を図り、その結果、自国の国益又は自国企業の利益に繋がる活動を行うことになる。

この中野学校は秘密戦士の科学的養成や秘密戦の研究を目指した学校であったので、戦後、単なるスパイの養成機関のように捉えられ誤解されていることも少なくない。また、中野学校の出身者は一切の名利も地位も求めず、自らの私欲を制して大義に就くことを信条とし「中野は語らず」を不文律にしていたので、世に正しく理解されていなかった。

後述している通り、この中野学校は、世界で言われている単なるスパイ学校とは全

く異質の学校であった。

中野学校への入学に際しても本人の意志が尊重され、また入学後も本人の意思で退校も認められていたのは、当時の軍部にあった極めて特殊なケースであった。

現下の社会に於いて情報は政策、企業の事業展開、科学・技術及び文化などあらゆる分野に大変重要である。この情報を企業運営の一つの判断基準にして、夫々の方向及び計画がされ実行されている。他方、この情報が我々一人一人の思考及び判断の重要な基にもなっている。従って今や情報は社会活動の重要な判断基準の一つになっている。

今回、この中野学校の史実を調査し、彼らの航跡を知ることは、特に我々海外従事者への参考になると思う次第である。

2. 陸軍中野学校

1937年（昭和12年）ころ、日本が諜報に対して世界的な潮流からの停滞を余儀なくされることを怖れた陸軍省が、中心となって陸軍中野学校の創設を決定。岩畔、秋草俊、福本亀治各中佐を中心として1938年（昭和13年）3月に「防諜研究所」として新設。同年7月より特種勤務要員（第一期学生19名）の教育を開始した。1940年（昭和15年）には「陸軍中野学校」と改名し、1941年（昭和16年）には参謀本部直轄の軍学校へ転身する。

その存在は陸軍内でも極秘とされていた。当初は手探りの諜報者の技術養成機関であったが、その後、戦略・戦術教育機関（アメリカ陸軍の特殊戦スクールに相当）へと変貌する。1938年の開校まで 統合された教育機関がなかった為、日本軍にとっては有意義であったが、遅きに失した感はある。学生は陸軍士官学校、陸軍予備士官学校、陸軍教導学校（1943年（昭和18年）8月廃止）出身者から選抜されたが、その大半は一般大学卒等であり、陸軍士官学校卒の者は少数であった。



中野学校の剣術訓練光景

3. 中野学校の精神「誠」

陸軍中野学校と言うと、スパイ養成機関を卒業した一青年将校を市川雷蔵が演じた映画（1966年に放映）が有名であった。

しかし、実際の中野学校は単なるスパイ学校ではなかった。スパイと言うと目的のため謀略、諜報という手段を択ばない一見きわめて悪辣、非道な活動が要求される暗い印象があるが、それは全く無かったと言えないかも知れないが、実際はそうではなく、大義のもとで科学的でもあった。

中野学校に於いては謀略（Deceptive trap又はPlot）と言うより策略（Stratagem）に近い教育内容であった。

その策略が理に於いて道理が通っており、情に於いて真情であること、つまり人間らしい感情と、ものごとのあるべき道筋をわきまえていることを重要視していた。所謂、情理をわきまえた「誠」であった。この精神=哲学が中野学校を語る上で大変に重要な骨格であると判断しても過言ではない。

換言すれば中野学校は、単なるスパイ＝諜報員と言うのではなく、改革者又は革新の旗手として、現在風に言えば優秀な人材(管理者と人物)を養成したのである。従って、後述する当時植民地の人々が塗炭の苦しみを受けていたアジア諸国の解放にこの中野学校の卒業生が命をかけて大きな役割を果たすことになったのである。この他に遊撃戦幹部要員の養成コースもあった。



小野田少尉（遊撃戦幹部養成の出身者）（朝日新聞社）

4. 教育内容及び学生の種別

● (1) 内容

1938年（昭和13年）7月に入学した第一期生19人（大卒3人、専門学校11人など）の科目は軍事学（兵器、築城、航空学等）、外国語（英語、ロシア語、中国語）、武術（剣道、柔道）、細菌学、薬物学、法医学、実習（通信、自動車等）、その他（気象学、交通学、心理学、統計学）などの多種多様に亘っていた。諜報、謀略、防諜、宣伝を中心にしながら改革者を要請するために、政治、経済、思想、宗教といった科目も設定されていた。

● (2) 学生の選考要領と本人の意思での退校承認

学生採用の要領は、秘密革命戦士としての各種専門知識と精神的、肉体的に優秀な者を選ぶことは当然であるが、学内の秘匿をするために多大な苦心がなされていた。中野学校の学生の主体をなしたのは次項で述べる予備士官学校卒業生（大学、専門学校、中学）より選別された丙種学生であった。選別要領は次のようであった。

- ①陸軍省から各兵科の予備士官学校へ適任と思われる学生の推薦を依頼する。
- ②予備士官学校の中隊長が適任と思われる学生を選び本人の意思を尊重し、多くの学生を中野学校へ推薦する。
- ③中野学校がそれらの報告書に基づき書類選考し、受験者を決定する。
- ④陸軍省、参謀本部、中野学校職員が受験者に対して口頭試験と身体検査を行う。
- ⑤選考の結果を総合して採用者を概定し、憲兵が家庭調査を行い、その結果に基づき採用予定者を決定する。
- ⑥採用者を中野学校で、再度本人の意思を確かめ、その上で再度、身体検査を行い、採用を決定する。

特記すべきは、中野学校に入学しても、本人の意思で退校を願い出れば、身分を取り消し、原隊に復帰させていた。このように入校を強制したりせず、また退校に応じたりして、本人の意思を尊重したので、学生本人が秘密戦士としての自覚及び誠心に基づく任務遂行を軍が如何に期待していたかが窺い知れる。これは現在の企業に於ける社員採用にも多大に参考になると思う。

● (3) 学生の種別

中野学校は創立当初、予備士官学校出身の将校のみであったが、その後の状況から鑑みて、陸軍士官学校出身の将校及び教導学校出身の下士官も採用することになった

た。

1940年（昭和15年）8月に制定された陸軍中野学校制令によれば「甲種学生」「乙種学生」「丙種学生」「丁種学生」「戊種学生」に分類される。この他に遊撃戦や司令部情報などの将校を要請するための学生もいた。

①甲種学生

乙種、丙種の過程を経て秘密戦に関する最高度の企画力遂行を取得するとともに陸軍省・参謀本部の関係者と共に調査研究にあたり、もって我が国の国運進展に必要な諸施策の立案に寄与する目的であり、修業期間は一年であった。但し、中野学校の継続が短期間であったので、この甲種学生制度は実施されなかった。

②乙種学生

陸軍士官学校卒業の中尉、大尉を主とし、修業期間は2ヵ年であったが、当時の情勢で一年ないし8ヵ月になった。

1乙から5乙まで存続した。

③丙種学生

予備士官学校出身者であって、修業期間は2ヵ年であったが、戦争末期には1年ないし8ヵ月になった。

1丙から10丙まで存続した。有名な小野田少尉は遊撃戦幹部要員として、この丙種学生であった。

④丁種学生

戊種学生出身の下士官を将校とするための制度で、修業期間は1ヵ年であったが、実現せず終戦になった。

⑤戊種学生

下士官候補生出身を試験により採用した。修業期間は1ヵ年であったが、初期を除き8ヵ月となった。

5. ビルマの独立と陸軍中野学校

●（1）一般情勢

1940年（昭和15年）3月にビルマルートが開通した。ビルマ・ラングーン（現ヤンゴン）～マンダレー～ラシオを経て、中国の昆明～重慶に至るルートが開通し、蒋介石が率いる中国重慶政府へ英米が軍事物資を含む多大の援助を行なえるようになった。

そのために膠着状態にあった支那事変の解決が一層困難になった。この様なおり、

ドイツによりヨーロッパで戦争が始まり、1940年5月には英国、仏蘭西もドイツに宣戦を布告し、ここに第二次大戦が勃発した。

こうしたヨーロッパの情勢変化により、当時の日本政府（第二次近衛内閣）は同年7月26日の閣議で「基本国策要項」が決定され、翌27日「世界情勢の推移に伴う時局処理要項」が決定された。支那事変の解決に悩む政府と軍が、南方に活路を求めようとして、当時、次の最高方針を定めた。

『一 帝国（日本）が英米依存の態勢より脱却し、日・満州・支那を骨幹とし、概ね印度（インド）以東豪州・ニュージーランド以北の南洋方面を一環とする自給態勢を確立するは、当面帝国の速急実現を要すべき所にして、是が達成の機会は、今日を措き他日に求むること極めて困難なるべし。一』そして、第1条から第4条まで決定された。これを受けて約6か月後に『南機関が設立』された。

ビルマの反英独立運動は1937年（昭和12年）、ビルマ統治法の施行以来、頓^{とみ}に活発化し、その主体となったのがタキン党（我ら人民党）であった。この党の発祥は日本とも関係が大変に深いので次に些か説明をさせて頂く。

● （2）ビルマのウ・オッタマ僧正の来日とタキン党の結成

ウ・オッタマ=U Ottamaは若いころイギリスに留学して、帰国後、抗英独立運動を唱えて投獄され出所後、小国日本が、超大国ロシアに、日露戦争で勝利を得たことに感動し、1907年（明治40年）、来日して日本全国を巡行した。奇遇にも『松坂屋 伊藤次郎左衛門』に会った。伊藤次郎左衛門は名古屋の豪商であり、ウ・オッタマを3年間、面倒を見ており、その一年後実妹を含む6名まで日本に呼んだ。次郎左衛門はオッタマを精神的にも、経済的にも支援した。オッタマはその間、日本を学び、東大で仏教哲学も教えた。当時のビルマはイギリスの植民地であった。



オッタマ僧正（中央）と6名の来日者(緬国から日本への第一期留学生)

オッタマはその独立のために日本で学び日本で得た結論を『日本』という著書に集約した。その中で『日本の興隆と戦勝の真因は明治天皇を中心にして青年が団結して起ったからである。我々も仏陀の教えを中心に青年が団結、決起すれば、必ず独立を勝ち取ることができる。』『長年のイギリスの桎梏（しっこく）からのがれるには、日本に頼る以外に道はない』と主張した。この著書が、独立を志向するビルマ青年のバイブルとなり、1930年に『タキン党』（われらビルマ人党）が結成された。このタキン党で学生運動のリーダーとして活躍したのがアウンサンやウ・ヌーらである。このタキン党の青年志士30人が後日、密出国して海南島など日本式軍事訓練を受け、大東亜戦争を日本軍と共に戦い、遂に独立を果たした。その主導者が上述している後のビルマ建国の父アウンサンで、元ミャンマー連邦共和国のアウンサン・スーチー国家顧問は、このアウンサンの娘である。

● （３）南機関の設立

1940年7月26日、日本政府（第二次近衛内閣）は閣議で「基本国策要項」が決定され、世界情勢の推移に伴って南方に活路を求めようとして、当時、次の最高方針を定めた。これを受け、ビルマの独立運動を任として1941年（昭和16年）2月1日に鈴木大佐に対して陸海軍両総長からの訓令下達により南機関が発足した。訓令の本文は次の通りであった。

『鈴木敬司大佐ハ南機関長トナリ、（ビルマ）ノ独立ヨ援助スベシ、（ビルマ）領内ニ対スル武力行使開始ノ時期ハ追テ示ス』

また「南機関外史」に次のように記載されている。

『南機関は其の発足進展途上に於いて、やや複雑性を有するも、之は正式に云えば昭和16年（1941年）2月1日大本営陸海軍部直属緬甸（ビルマ）工作機関として設立せられ、後、大本営海軍部の手を離れ、大東亜戦争勃興と共に南方軍総司令部に隷属し、次いで第15軍林1611部隊に配属せられたる特務機関なり』



南機関の鈴木大佐機関長

● （４）アウンサンとラミヤンの来日

鈴木大佐はタキン党の第一人者であるタキン・コンドー・マインに会い、熱心に日本が独立の支援をすることを説き、密約を結んだ。これにより日本がビルマ民族運動支援の指導権を他国に先んじて握ることができ、鈴木大佐は1941年9月にティモン博士からアウンサン及びラミヤンの写真を入手した。二人は8月8日に英国官憲の追及を逃れ、苦力に変装しチャイナ・サイアムラインの客貨車船（海利号）に乗船して、厦門（アモイ）に向かっていた。鈴木大佐は帰国途中、台北に寄り台湾軍の田中参謀を通じてアウンサンとラミヤンの写真を厦門の特務機関に送り、二人の確保と東京への護送を依頼した。神田憲兵少佐によって、厦門国際租界の中国系旅館の食堂で二人を発見することができた。アウンサンもラミヤンも当初、日本に行く予定は持っていなかった。この日本へ行くまでの経緯は今後の我が国にとっても参考になるから、その概略を特に記述する。



鈴木大佐宅 右端がアウン・サン、左がラミヤン

『ビルマのタキン党は独立支援に関して中国共産党と何らかの協定を結んだが、その協定自体が不十分な内容であり、その後タキン党から同党に連絡をとるも徒労に帰した。そこで、タキン党はアウンサンに中国政府（重慶の国民党政権）と連絡をとることを決めたが、雨季で重慶に行く事ができず、英国官憲の追及が急なためにアウンサン達をビルマから海路厦門に脱出させた。アウンサン達は厦門から必死に中国と連絡をとろうとしたが、不成功に終わり、絶望の淵にいるとき、神田少佐に発見されたのである。そして、二人は最初驚いていたが、ティモン博士よりの依頼と聞き安心して、日本行を承諾したのである』

我が国とビルマ独立派の人々との間に、未だ信頼と友情が、確立していない段階では、ビルマにとって日本は単なる一支援国として存在しているにすぎなかった。

1940年（昭和15年）11月8日アウンサンたちは羽田飛行場に到着した。ところが日本の事情は未だ受け入れられる準備が出来ていなかったもので、飛行場から税関を通

関するのにも身分を明かすわけにはいかず、鈴木大佐は苦勞することになった。大佐は時を待たねばならないと思い、二人を連れて郷里の浜松に帰り、自宅に一時匿うのである。しかし、その後も事情により浜名湖弁天島の小松屋旅館などと東京の宿と移動しながら、独立運動の構想を話し合ったのである。



浜松市の鈴木大佐宅で和服を着たアウンサン

● （５）ビルマ独立の志士の来日

1940年11月にアウンサンとラミヤンが来日したおり、日本の大本営参謀部の対ビルマ計画が定まらず、半ば宙ぶらりんの態に置かれていたようであったが、しかし、それも僅かな期間だった。翌年初めにビルマルート遮断の問題が緊急課題となったことで参謀本部側の南機関に与えられた最初の作戦行動は、数十人のビルマ人に軍事訓練を施し、軍事エリートを育成することであった。



アウンサンが川崎港で乗船の春天丸

ここで、ようやくにして、アウンサン達は陽の目をみるにいたった。参考までに南機関長（鈴木大佐）がアウンサンと杉井氏（アウンサンに同行）に発した作戦命令

第一号の概略を列記する。

▼作戦命令第一号 <昭和16年（1941年）2月14日 於駿台荘>

- 1) 貴官（杉井氏）は春天丸の事務長として、明15日川崎を出帆、緬甸（ビルマ）に至り左記任務に服し面田紋二（アウンサン）の行動を指導援助す。革命党員の脱出を援助し且つ之を教育実施地に連行す。緬甸に於ける新情報を募集す。

※2)～5)は省略する

命令を受けたアウンサンたちは余りにも急激なことであり、面食らったこともあったが、何とか処理し、南機関長の指導で艤装の船員手帳を貰い、船員服に身を包み川崎港からビルマ米買付の大同海運春天丸に乗りこんだ。命令受領した翌日の2月15日未明、船は川崎港を出港しビルマにむかった。

船はイラワジ河下流、米の積出港で有名なバセイン港に到着した。



現在のバセイン港

ビルマ脱出党員に渡すべき乗船の手配書、機密書類などを特殊用紙に書き写し、アウンサンは入れ歯である虫歯の穴に詰め、春天丸の機関長と船員2人と共にバナナをかう名目で税関の正門を突破し、林の中で素早くロンジーを履いてビルマ人に返った。機関長達はアウンサンが脱ぎ捨てた船員服を二重に着込み船に帰った。バセイン港を出港するとき、英国官憲が春天丸の船員点呼をしたが、全ての書類を1名減らしていたのでアウンサンの脱出、潜入は全く気付かれなかった。

ビルマ密航には薄氷を踏む場面もあったが、南機関員を中心とした両国の関係機関の全面協力のもと、アウンサンはタキン党の地下ルートなどを駆使し、有力メンバーとのコンタクトに成功。陸路・海路を経て日本に辿り着いたビルマ人青年は30人に上った。この30名が、後にビルマ独立の伝説に語られることになる「30人の志士」である。

日本に脱出したビルマ青年、概ね1941年（昭和16年）6月頃までに30名に達した。当時、日本は開戦前であり、これら工作の秘匿をはかるために、また軍事訓練のお

り主に日本語を使用することもあって、彼ら30名は全て日本姓名を名乗っていた。これも、ビルマの志士が一層日本色を色濃く持つようになった主要な原因である。

●（６）海南島での軍事訓練

当初、南機関はビルマ青年に台湾などで軍事訓練を施す予定であったが、彼らの軍事訓練を英国などの関係国に発見されると大きな国際問題になる。そのほか気候条件がビルマに似通っているという理由もあって結局、選ばれた訓練地は海南島（現在は中国領土）南部、榆林港に隣接した人口2,000人ばかりの日本海軍基地三亜の町から50キロ離れた密林の中だった。

日本に集結した30人のビルマ青年は、箱根で束の間の静養を終えると1941年（昭和16年）4月頃から順次三亜訓練所に送り込まれた。



三亜での訓練光景、中央は日本軍教官

訓練班の基礎訓練は同じであったが、教育目的によって次の三班に分かれていた。

①第一班は主として中隊長以下の実兵の指揮、兵員の訓練などができる指揮官の養成。

②第二班はゲリラ、謀略破壊活動の指揮官養成。

③第三班は予想作戦に対応する師団以下の運用ができる高級指揮官の養成。

彼ら30名は独立の意識は立派であっても、軍事知識は皆無であったので、訓練は全くの初歩段階から行わねばならなかった。従って訓練内容は作戦要務令を中心とした各種戦闘の基礎、武器使用法、偵察法、謀略法、作戦法と図上演習などであった。そのように軍事知識のない者を、通常であれば2年かかるところ、数カ月間で一人前にするのであるから、訓練は大変に厳しいものであった。

短期間の訓練で早期に習熟するために危険であったが、小銃、機関銃、手りゅう弾、小大口径の大砲などの実弾を使用し毎日が真剣勝負であった。また、ジャングルの暑いまただ中であったから、疲労も激しかった。ビルマの若い独立の志士たちは必死になって日本の教官についてきたが、疲労困憊し脱落しそうになると、さっそ

く怒声が飛ぶ。

「そんなことで英軍をビルマから追い出せるか！」

「そんな意志薄弱で独立が獲得できるか！」

実際にこの訓練の教官を務めた陸軍中野学校出身の泉谷陸軍中尉は次のように話している。

「私は今でも教官であった南機関のスタッフほど、ビルマ人のビルマ、ビルマ人の独立を純粋に願った人々はいないと思う。」

そうしたビルマの独立を純粋に願う気持ちだが、激しい訓練でのビルマの違和感などを二ヶ月、三ヶ月経つと30名の訓練生と教官たち間の距離を一気に埋めてしまった。夕食時、彼らは今ビルマで進んでいる地下組織活動や武装蜂起の作戦に議論をわか

せ、何時も“Daw Burma”のタキン党の歌を合唱し終了としていた。リーダーはアウンサンが務めたが、グループ中にタキン・シュモンすなわちネ・ウィンがいた。ネ・ウィンは理解力に優れ、ひ弱そうに見える体格の内に凄まじい闘志を秘めていた。

※ネ・ウィンはたちまち頭角を現し、アウンサンの右腕を担うことになった。(ネ・ウィンは後のビルマ大統領である。)

このようにして訓練を終え、1941年（昭和16年）10月5日に三亜訓練所を閉鎖し、訓練隊員は榆林港から台湾に向かった。その後、彼ら一行は順次タイ国のバングコックへ移動していったのである。

● （7） ビルマ独立義勇軍（BIA）の誕生

1941年（昭和20年）12月8日日本は戦争に突入した。これによって南機関の作戦計画をゲリラ戦、即ち「小規模な兵力による戦争方式から戦力規模を大きくし、我が国の南方正規軍と共同してビルマを独立さす」方式へ変更することにした。

1941年（昭和16年）12月28日タイ・バンコックの中華総商会庁舎に於いて、ビルマ（ミャンマー）の古い伝統的な儀式にのっとり『ビルマ独立義勇軍（Burma Independence Army, BIA）』の結成宣誓式が行われた。これが現在のミャンマー国軍の母体である。

この結成には、アウンサンを含めた独立の志士30名とタイなどに居た約200名のビルマ人が参加した。日本人としては初代BIA軍司令官となった南大将（鈴木大佐）以下、南機関員が中心となり74名の日本軍人及び軍属がBIAに参加している。文字通り、日・緬合同軍であった。



BIA 高級参謀アウンサン

1) 司令部 (ボーモージョー)

軍司令官 南大將 (鈴木大佐)
 参謀長 村上少将 (野田大尉)
 高級参謀 面田少将 (アウンサン)
 参謀 糸田中佐 (ラミヤン)
 参謀 平田中佐 (オンタン)
 軍医長 鈴木少将 (ドクター鈴木)

2) BIA主力 (司令部と共に行動する)

前衛
 本隊 司令部
 親衛隊 隊長 大坪大佐 (山本中尉)
 本隊 隊長 鈴木大佐 (鈴木中尉)
 谷口大尉 (ボーチョーゾ)
 後続隊隊長 稲田中佐 (稲田中尉)

この本体の他、③ダヴォイ兵団、④モールメン兵団、⑤水上 (海軍) 支隊、⑥田中謀略班、⑦ビルマ領内攪乱軍指導班《班長 高杉中佐 (ボ・ネウイン) 戦後ビルマ首相》が組織された。

この義勇軍の中核を占めていた中野学校出身者は次の通りであった。

▽モールメン兵団

鈴木中尉、田中中尉、稲田中尉、平石軍曹、小柴、鴻巣、木迫、青木、財前、土井の各軍曹、池田、田中、永見各伍長

▽ダヴォイ兵団

川島大尉、泉谷中尉、土居中尉、塔本少尉、衛藤軍曹、谷崎、森、椎名の各軍曹

▽水上 (海軍) 支隊

秋川少尉、今川軍曹、池辺軍曹、野瀬軍曹

以上の兵団の他に陸軍中野学校の卒業生は高橋中尉、山本中尉、田中少尉など他

の軍曹などもこの義勇軍にいた。

●（８） BIA によるダヴォイ市（現ダーウェ市）の解放と民政移管

第15軍支隊とBIAによって、1942年1月19日ダヴォイが陥落するとBIAは直ちに市民たちによる「ダヴォイ民政府」を樹立した。これは治安面にも非常な成功をもたらし、わずか二、三日の内に市は安定した。

ダヴォイの住民はBIAを自由の軍隊として歓迎し、日本の軍隊を独立の同志であり、救世軍として親しみをもって迎えた。民政府は全力を挙げてBIAと日本軍に、軍資金、食糧、労力、必需品を供給した。

日本人はBIAの志願兵が物凄い勢いで集まるのですっかり驚いてしまった。地下独立組織がここまで能率よく組織化されているとは決して予想もしなかった。

※ダヴォイTavoy（現ダーウェDawei）、Dawei Special Economic Zone（Dawei SEZ）

日本・メコン地域諸国首脳会議が2015年7月4日東京で開催され、日本政府はダーウェ経済特区開発への協力を正式に表明した。タイ・ミャンマーから日本に御術、資金面での支援が求められていた。東南アジアを結ぶ「南部経済回路」の生産、物流拠点になるであろう。このようにダーウェ（旧ダヴォイ）は我が国と誠に不思議な縁で結ばれているようだ。

●（９）ビルマ領内攪乱軍指導班の活躍

後方攪乱、情報収集および兵員募集などの目的で、高杉中佐《(ボ・ネウィン) 戦後ビルマ首相》が率いるビルマ領内攪乱班は平石、木迫BIA両少佐（両少佐は中野学校出身の軍曹）と共に兵員募集後の訓練に供するために、また後方攪乱に必要な武器、爆破材、貨幣、食糧などを携帯して1942年（昭和17年）1月14日タイ国ラーヘンを出発した。



左ボ・ネウィン、右アウンサン

一行はインドシナ山脈を超え、国境のサルウィン河支流タウンジン河畔に到着した。ボ・ネウインを初めビルマ志士たちは黒々と濁流するタウンジン河の急流に呆然となった。比較的流れが遅く川幅が狭い（100m以上）所を見つけ、木迫少佐がロープをもって河に飛び込んだ。しかし、流れに押されて数度の失敗を繰り返した後、ようやく対岸に泳ぎ着き、ロープを渡し、全員が渡河を完了させた。ここからはビルマ志士たちが活躍する番になった。彼らは早速ビルマ服装に衣替えし、武器、爆破材、貨幣を分配し、これが今生の別れになるかも知れないと思い、互いに水盃を交わし、一人ひとり握手して、二人ずつ三班に分かれたビルマ志士達は密林の中に消えていった。以下“The Root of Revolution”の記述による。

* The Roots of the Revolution : 「A brief History of the Defense Services of the Union of Burma and the Ideals for which they stand / Dhaminika U Ba Than.」

彼等は英印軍と官憲の目を潜って、それぞれラングーン（現ヤンゴン）に向かった。その途中彼らは地下組織と連絡を取りながら進んだ。ラングーン陥落一ヶ月余り前の2月2日日本軍主力が未だシッタン河付近で戦闘を交えているところに、早くもラングーンに入った。ボ・ネウインらの到着がビルマの地下組織をどんなに勇気づけた事かは、はかり知れないものがあつた。彼らは早速ペグー（現バゴー）に軍事訓練所を造り、各地区から、挙って集まった若者たちに軍事訓練を始めた。これらの訓練不十分な兵ではあつたが、英印軍の背後を脅かすゲリラ活動を展開し日本軍が攻略前に大いに活躍したのである。ボ・ネウインのこの手腕が後に彼がビルマ首相になった大きな原因である。



応募したB I A兵員の訓練光景、隊旗は孔雀

● (10) BIA ペゲー（現パゴー）入城

1942年(昭和17年) 2月 ラングーンの東70キロに位置するペゲー(現パゴー=Pago)の町は、突然の恐怖に見舞われた。列をなして行進して来る兵団を一人の農民が郊外で見かけ、不穏な噂が急速に広まったのだ。

「ついに日本軍が来た…」

英国植民地政府の悪宣伝によって当時の日本軍は恐れられ、家々は固く門戸を閉ざした。夜が開けた頃、町に入ってきた兵団の叫ぶ声が町中に響き渡った。しかし、「ドバマ(われらビルマ)、ドマバ、戦いは勝利だ」ビルマ語だった。

行進してきたのは日本軍ではなく、激戦を重ねてきたBIA(ビルマ独立義勇軍)の軍隊である『我々はビルマ独立義勇軍である。攻撃を加える為にやって来たのではない。平和な暮らしを守る為にやって来たのだ』

恐怖に覆われていた町は一転して歓喜に包まれた。演説が行なわれた広場は群衆で埋め尽くされ、BIAは歓迎の嵐で迎えられた。英国植民地の桎梏から解き放たれた瞬間である。



BIA を歓迎するペゲー市民

この時、旗を掲げて演説した隊長は、ボ・ソーオン(日本名 桂、後に戦死)。ビルマ独立史に大きな足跡を残す「三十人志士」の一人だ。数々の伝説と栄光に彩られた「ビルマ三十人志士」は、今も、そして永遠にビルマの英雄として語り継がれているのである。

● (11) BIA ラングーン（現ヤンゴン）入城

3月7日英印軍はラングーンを放棄し脱出、3月8日日本軍第33師団がラングーン(現ヤンゴン)を占領した。次いでBIAも続々とラングーンへ入城した。このときBIA

の兵力は約1万余まで増加していた。

3月25日、BIAはラングーン駅前の競技場で華々しい観兵式典を行った。オンサンを先頭にした4,500名のBIAの行進に、ラングーン市民は熱狂した。1941年末に200人規模で産声をあげたBIAはその時、兵員数3万人にのぼっていた。この行進中、BIA最高指揮官・鈴木敬司大佐は白装束を身に纏って登場する。

鈴木大佐のBIAでの呼称はボ・モージョー（＝雷帝）であった。



ラングーン市内を行進する BIA

ビルマ最後の王朝が英軍に倒された後、現地ではひとつの民間伝承が生れた。

それは「雷帝、東方より来たり、ビルマ族の解放をもたらす」というもので、BIAの進撃途中「雷帝来る」の噂は瞬く間に広がった。一部の戦史家は、これを鈴木大佐の巧みな情報操作と断定している。しかし、南機関の主要メンバーだった中野学校出身者の泉谷達郎氏によれば、偶然の産物で、鈴木大佐が民衆の伝承を知ったのはビルマ進撃の途中だったという。また、その名付け親はアウンサンでもあった。現在に至っても、ミャンマーではボ・モージョー鈴木の名が知られ、尊敬の念を受け続けているのである。

● （12）平山水上支隊の活躍とビルマ海軍の創設

1941年3月5日ベンガル湾ビヤポン最南部から海岸に沿って北上した平山水上支隊は、首都ラングーンの後背地にあたるデルタ地帯に危険な敵前上陸を大胆に敢行。その際、地元民の間に「日本軍数千名とビルマ義勇軍2,000名が攻撃準備中」との偽情報を流す。このために退路を遮断されたと思い、恐れをなした英軍は首都を放棄して撤退。結果的に、激烈な市街戦が行なわれることなく、昭和17年3月9日にラングーンは陥落した。

それを聞いた平山水上支隊長は直ちに、隊員を増員したBIAを率いて舟艇でイラワジ

川本流を遡行し、途中、3月16日水上支隊は勇敢にもヘンサダ（現ヒンタダ＝Hinthada）で密かに日本軍を挟撃しようとしていた英軍の虚を突いて攻撃した。水上支隊の今村軍曹、ボヤナイン（Bo Yan Noing 日本名 山下）などの奮戦により敵を敗走させ、日本軍の窮地を救い、市を開放した。その後、デルタ地帯を約200kmも北上したプロム市（現ピエ市＝Pyay）から南方13kmのシュエダウン（Swedaung）市に3月29日到達した。「戦車約100両を有した英軍がシュエダウン南方の道路上にあり、部落には相当数の英軍がいる」との情報を得た。



1942年6月20日ビルマ海軍創設、左端は南機関長（鈴木大佐）

本格的な装備をした敵であった。

平山水上支隊は33師団の佐藤大隊と連携して、この強敵を攻撃した。大変な激戦であって、彼我の距離が50mに迫る場合もあった。今村軍曹およびボヤナイン率いるBIAも勇敢に戦ったが、ついに平山水上支隊長は戦死するに至った。

これらの活躍により、南機関長（鈴木大佐）から命を受けた佐藤軍属がマグ・テイン元英海軍中尉など英国海軍に在籍した30名を集め、1942年（昭和17年）6月20日に小さいながらもビルマ海軍が誕生した。その後、日本海軍の訓練を受けビルマの海岸線やデルタ地帯を警備する任務にあたった。これが現在のミャンマー海軍の母体になっている。

● （13）ビルマ（緬甸）幹部候補生隊

1942年8月にラングーン市の郊外ミンガラドン（現ヤンゴン空港地区）に《ビルマ（緬甸）幹部候補生隊》が開設された。校長は陸軍中野学校の卒業生である川島元BIA中将（大尉）が就任し、隊長以下教官の多くは中野学校出身者であり、全て日本軍将校と下士官であった。生徒の資格は16歳以上の年齢であって健康且つ学業優秀であり、出身地の有力者の推薦が必要であった。教育は全て日本語で行われ、期間

は6ヶ月で将校教育を実施し終了者中、成績拔群者は日本の陸軍士官学校に留学派遣され、成績優秀な者は将校に、他は下士官に任命された。

日本の陸軍士官学校へ留学した者は次の通であった。1943年（昭和18年）から1944年（昭和19年）の間で、歩兵科50名、砲兵科10名、航空科10名、計70名であった。一方、京都大学の大野氏著によれば、このビルマでの幹部候補生隊では終戦までに1,054名（但し2期生人数は不明で含んでいない）と併設された幼年学校260名が日本軍の教官によって日本語で軍事教育をうけている。

また、この「緬甸幹部候補生隊」は戦後ピンウーリン（旧名メイミョウ）に創設された「緬国軍士官学校」の母体となっている。



緬甸幹部候補生隊の訓練

この緬甸幹部候補生及び幼年学校の卒業生は日本への留学組も入れて、戦後、緬国の重鎮となり要職を占めており、緬国が親日である一大原因にもなっている。この時使用された柔剣道の日本式防具が現在もネピードの軍事博物館に展示されている。

● （14）南機関の解消とビルマ軍の日本からの離反

日本軍とBIAは1942年5月末頃までに英・印・中国軍を追い払いビルマ平定を成し遂げていた。この時期に於いて、中野学校卒業生の南機関と鈴木機関長はビルマに独立を強く指示したが、南方軍はそれを拒否し、6月18日、鈴木大佐を近衛師団司令部付きに発令し、南機関を解消させてしまった。

その後、遅まきながら1943年8月1日、日本政府はビルマに念願の独立を与え、バーモー政権が成立し、アウンサン少将が国防大臣に入閣し、その後継者としてネウイン大佐が司令官に親補された。

英軍駆逐、即独立を真にしていたビルマ人は1942年2月モールメン（現モーラミャン）

攻略後の日本軍による軍政を知らされた時から、対日本不信感を決定的にしていたので、この独立（バーモー政権）を傀儡政権と見做しており、1945年3月27日、日本軍に関して武装蜂起したのである。



南（鈴木）大佐への感謝状、現ネピード軍事博物館に展示

しかし、ビルマ軍及びアウンサン将軍は南機関員を大変に尊敬し、アウンサンからの鈴木大佐へ兄として感謝状を送っている。またアウンサンが死去後、アウンサンの後継者で30人の志士であったネ・ウイン大統領はビルマ軍事政権を代表して、ビルマの第33回目の独立記念日に当たる1981年1月4日、ビルマ独立に貢献した7名の日本人に対して感謝の意を表し「アウン・サン勲章」を授与した。その7名とは鈴木敬司氏未亡人、杉井満、川島威伸、泉谷達達郎、高橋八郎、赤井（旧姓鈴木）八郎、水谷伊那雄の各氏で、全員が南機関関係者であった。それらの多くは中野学校の卒業生であった。

また、2014年9月23日、ミャンマー大統領と国家の権力を2分するミャンマー国軍最高司令官ミン・アウン・フライン（Senior General Min Aung Hlaing, Commander-in-Chief of Defence Services）上級大将夫妻を代表とするミャンマー国軍代表団が、自衛隊の岩崎茂統合幕僚長の招きにより、28日までの日程で日本を公式訪問され、今は亡き鈴木敬司陸軍大佐（当時）の墓参と旧宅を訪問された。毎年ミャンマー国軍の将官が数名来日されることが継続されている。また、我が国防衛省はミャンマーのピンウーリンにある国軍士官学校へ日本語講師2名を現地に長期間派遣し、ミャンマー人教官の育成及び学生の指導を通じて、将来的に国軍士官学校自らが日本語教育を行うことができる体制を整備している。



アウンサン勲章を授与された7名の日本人

何れに致しても、ビルマ派遣総軍は、南機関が抱いていたビルマ独立を実現していたならば、その後のビルマ情勢は変わっており、少なくとも18万人もの日本将兵がそのような悲惨な死没は避けられていたと言える。誠に残念な事ではあるが、我々はこれを今後に生かさねばならないと思う。

6. インド独立と陸軍中野学校

● (1) 当時の情勢（インド独立の曙）

1498年にポルトガルのヴァスコ・ダ・ガマがカリカット（コーリコード）へ来訪し、1509年にディーウ沖海戦でオスマン帝国からディーウを奪取した。これによりポルトガルはインド洋の制海権を得て、ポルトガル領インドを築きその後約百年間は、インドはポルトガルの支配下にあった。1609年に入って英国がこれに代わり、以後三百年にわたりインドは英国の植民地になっていた。

その後、1857年のセポイの大反乱などインドの英国支配に対する抵抗が度々起こった。しかしながら、英国の近代兵器のまえには仕方なく屈服せざるを得なく、英国国王を代表とする総督によって統治されるに至ったのである。

この総督統治による封印政策に対してインド民衆の反抗運動は益々根強く且つ大規模になったので、英国は1885年に「インド国民会議」を創設し、インド人をインド統治に参加させ、民衆運動を緩和させようとし、一応民主運動を下火にしたが、1904年に日露戦争で小国日本が大国ロシアを破ったことが、インド民衆運動を刺激し、インド独立運動の志士を勇気づけた。

1919年4月パンジャム州の「アムリツァ市の大虐殺事件」では英軍の発砲により

三百七十九名の死者と一千名の負傷者を出した。この事件がインド民族運動の大きな転機をもたらした。1940年当時、ガンジー、スバス・チャンドラ・ボーズ、ネルー達は民族解放運動の三偉人としてインド大衆から大いなる尊敬を受けていた。このような情勢下で黙考した第二次大戦に於いて、日本はインド独立運動の支援に乗り出した。

● （２）開戦と陸軍中野学校母体の藤原機関（F 機関）

1941年（昭和16年）12月8日、我国の旧陸軍18師団の佗美（たくみ）支隊は当時の英領シンガポールを攻略するがために、マレー半島コタバルに上陸し、日、英の戦端が切って落とされた。タイ最南部シンゴラ（現ソンクラ）に陸軍部隊が上陸し、英領マレー～シンガポールを目指して進撃を開始した。

インド、ビルマ工作機関としては陸軍中野学校創設への建白書などを提出した岩畔大佐の岩畔機関、それを継承した光機関が大きな組織であったが、実際的には少人数の藤原機関（F 機関）がマレー半島でインド独立機関を開拓し、その後もインド工作を行っているので、今回はこのF 機関の活動を中心に記述する。

陸軍中野学校の教官をしていた藤原参謀が率いた中野学校卒業生が中核となったF 機関（藤原機関）の頭脳と行動が、後にインド全土に独立の嵐を吹き荒らすとは、当時、誰一人予想していなかった。『F 機関の人々』こそ、アジアの解放・アジア諸民族団結、即ち『大東亜共栄圏＝現EU経済共同体と近似』の実現を実践した彼等も、また、大東亜戦争の英雄の人々であった。



当時の藤原少佐参謀、我が兵庫県の黒田庄出身

1941年（昭和16年）開戦直前に藤原少佐に与えられた指令は、東アジア各地にあったインド系秘密結社「IIL」との接触であった。バンコク（タイ）で「IIL」の指導者と密会を重ね、日本軍への協力を取り付けた藤原少佐は、開戦直後、秘密結社の指導者・プリタムシン翁を伴って飛行機で最前線に降り立った。

このプリタムシン翁は、戦場でインド人同士が混乱することを危惧して、腕章を巻くことを提案していた。誰にでも判る簡単な目印を提唱した。それが『F』マークであった。

Freedom（自由）、Friendship（友情）、藤原（Fujiwara）

僅か11人のメンバーで始まった『F機関の誕生』である。特に『Friendship』はこの機関の特徴である。特にメンバーに後述する『マレーの虎ハリマオ』で有名な日本人、谷豊氏もいた。

▽ F機関に配属された中野学校の卒業生（判明した者のみ）

土持、中井大尉、山口、原、中宮、服部、国塚、古橋中尉、塚本、藤井、松重、山田、金子、米村、瀬川少尉、中瀬、瀧村、諏沢、酒井軍曹、中村、青山伍長、田中兵長など

● （３）少数人数のF機関は武器を携えずマレー戦線で活動した

中野学校卒業生が中核を占めていたF機関が進めたのは、シンガポールを守備するためにマレー半島（現マレーシア）に駐留する英軍大多数のインド兵に対する日本への帰順とマレー半島に暮らすインド系住民への宣撫工作であった。つまり、白人植民地からの解放を旗印に、東亜（アジア）民族の団結を謳い、日本軍への協力を求めるものだ。

戦後、藤原岩市氏は著書でF機関の立場を以下に説明している。

「私達の仕事は、力をもって敵や住民を屈服させるのではない。また威容をもって敵や住民を威服させるものでもない。私達は徳義と誠心を唯一の武器として、敵兵に、住民に臨むのである」

その言に誤りはなく、F機関のメンバーは一貫して、一丁の拳銃も持たず、ほぼ丸腰で活動を続けたのであった。

● （４）インド兵を感動させたF機関の行為

日本軍が占領しF機関が本部をおいたマレー半島アロースターの町は、当初、権力の空白で風紀の乱れが著しかった。不逞分子が商店や市民を襲って、財産の収奪などを始めていた。

町に入った藤原機関長は、その惨憺たる光景を見て、捕虜であるインド軍モハーン

シン大尉に治安維持を要請した。昨日までの敵に町の警備をまかせるとは…、当の大尉は大変に驚いた。同時に彼等インド人兵にとって、白人に代わってやってきた日本人は信頼に値するアジアの仲間であったと述懐している。

1941年12月17日、F機関は、「IIL」メンバーやインド人将校、下士官全員を集めてささやかな昼食の機会を持った。テーブルにあがったのはインド料理だった。この昼食会は『インド人将校の間に驚くべき深刻な感動を呼んだ』という。

特にモハーンシン大尉は感激のあまり椅子から立ち上がりスピーチを始めた。

「戦勝軍の要職にある日本軍参謀が、一昨日投降したばかりの敗戦軍のインド兵捕虜、それも下士官まで加えて、同じ食卓でインド料理の会食をするなどということは、英軍の中では、なにびとも夢想だに出来ないことであった。

藤原機関長の、この敵味方、勝者敗者、民族の相違を越えた、温かい催しこそは、一昨日来われわれに示されつつある友愛の実践と共に、日本のインドに対する誠意の千万言にも優る実証である」

伝説が生まれた瞬間でもあった。

● （５）インド国民軍（Indian National Army=INA）の創設

1941年（昭和16年）の大晦日、藤原機関長はモハーンシン大尉から重要な申し出を受ける。それはINA（＝インド国民軍）の創設を願い出るものだった。このINAに参加するインド軍将兵の決断は自身の死を覚悟する他、インドに在する親兄弟の安否も気遣ったうえでの苦渋の決断を要求されたのであった。英軍からみればINAは反逆軍になるからである。

藤原機関長は重大な問題だと思った。要求の中には「INAを日本軍と同盟関係の友軍と見なす」といった条文もある。

しかし、全てを受け入れた藤原機関長は、その足で山下奉文將軍の司令部を訪れ、認可を取り付ける。インド兵を信頼していたのはF機関だけではなく、山下將軍も同じだった。

12月31日。インド国民軍INAはマレー半島の片隅で産声を上げた。そして、そのインド人待望の国軍は、シンガポール陥落直後に公然と姿を現すことになる。1942年（昭和17年）2月15日、シンガポールは我が軍によって陥落し、夕方には英軍のパーシバル將軍が降伏文書にサインして戦闘は終結する。

● （６）マレーの虎ハリマオのF機関へ参加

年配の日本人はマレーの虎ハリマオの名前は知っていると思うが、現在では殆ど知

られていないので少々説明をさせて頂く。映画では1943年6月マライの虎（大映）、1989年6月ハリマオ（松竹）で封切られている。テレビでは1960年からシリーズで放映（日本テレビ）されている。その他、小説、漫画などでもハリマオが出版されている。

このマレーの虎ハリマオは架空の人物のように思われているが、実は実在の人物で彼の名は谷豊（たに・ゆたか）という日本人である。

戦前、谷一家は福岡県から英領マレーのクアラ・トレンガヌに移住し、父親は現地で理髪業を営んでいた。1931年に満州事変が発生し、妹静子を虐殺した華僑暴漢（外来の広西人）が、マレー半島の植民地政府の裁判で無罪になり、何度も抗議したが、取り扱ってくれない。このことにより、谷豊は妹の仇を打倒してから、野盗団の一員となって、やがて才能を発揮し首領となり、ハリマオ（虎）と呼ばれる部下数千人を持つ一大野盗の集団となったのである。



マレーの虎ハリマオ＝谷豊氏

マレー半島のカンパルの村で中野学校出身の米村少尉が藤原機関長にハリマオ（谷豊）を紹介し、彼は彼の一団とともにF機関に入ったのである。

マレー半島北部のタイ国境近くにジットラ（マレー語版）という町がある。ここは当時アロースターを始めとする英軍の主要飛行場への玄関口にあたり、南下する日本軍にとっては是非とも攻略したい場所、逆に、守る英軍にとっては絶対負けない重要な場所だった。

本来ジットラは湿地帯であり工事は難航、工事を請け負っていたタイ政府も半ば匙を投げかけていた。ハリマオ一党はジットラ近辺の集落に拠点を構え、労働者の中

に紛れ込み、資材の投棄や建設機器工事の妨害工作を行った。

この結果、ジトラ・ラインの工事は大幅に遅れ、1941年12月12日、佐伯挺進隊の猛突進により僅か1日で突破された。また、英軍が橋に仕掛けた爆弾や爆破装置の除去なども行い、日本軍のシンガポール進撃を大いに助けた。

● (7) シンガポール攻略に参加したF機関とインド人国民軍 (INA)

1942年（昭和17年）2月23日シンガポール英軍の主要抵抗線であるニースン英印陣地に日本の近衛師団が攻撃を加えていたが、弾薬不足と兵員被害も30%になり、戦車部隊も立ち往生し焦燥の色がみなぎっていた。

この状況下で、F機関員で中野学校出身の中宮中尉の連絡班とインド人国民軍の工作隊長アラ・ディッタ大尉達は敢然と日本軍の最前線に進出していた。彼我両軍の将兵はこの一団の勇敢な行動に驚き成り行きを見つめていた。突然、アラ・ディッタ大尉は急に何かを決意したらしく、脱兎の如く走り砲弾で枝が千切れた一本の木の前に、仁王立ちになり、彼は叫んだ。

「友よ。撃つな。俺は二十二山砲連隊のアラ・ディッタ・カーンだ。日本軍は我々を殺さない。我々の友人だ。戦闘をとめろ!!」 全身全霊を絞り出す彼の声に一瞬、敵陣は射撃を止めた。彼はその機を逃さなかった。

「俺たちは、インド国民軍をつくる。日本軍は見方だ。敵ではない。マレーには数千の同志がいる。さあ、俺のところに来い」と…。

アラ・ディッタ大尉はポケットからインド国旗を出して、それを力いっぱい振り続けた。奇跡が起こった。パラパラと二、三人が駆け出してきた。それに遅れまいとして、ナダレを打って全大隊が飛び出してきた。と同時にニースン陣地にスルスルと白旗があがった。このニースンのありさまから、その後、インド兵の投降がみるみる大きくなっていった。

● (8) 5万人を前にした歴史的な大演説

シンガポール陥落後、英軍のインド兵捕虜をF機関が代表して接収することになり、市内のファラパークにインド兵が集められた。その数に日本軍が驚愕した。英軍のインド兵は多くて1万5,000人と推定していたが、実際には5万人いたのだ。公園はインド兵で埋め尽くされた。（確か日本軍総数は3万5千人位で、戦闘部隊人数は2万人強であったと思う。）

藤原機関長は5万人を前に堂々の大演説をおこなった！！

「親愛なるインド兵諸君！」



大演説の光景

写真に向かって左側（資料を持っている）が藤原機関長、
その右隣が通訳の国塚中尉（神戸市在住）、右隣がモハーンシン大尉

「シンガポールの牙城の崩壊は、英帝国とオランダの支配下にある東亜諸民族の桎梏の鉄鎖を寸断し、その放を実現する歴史的契機となるであろう」

これが国塚中尉から英訳されると満場の聴衆は熱狂状態に入り、言葉が翻訳される度に、拍手と歓声で言葉が継げなかったという。そして、こう続けた。

「そもそも民族の光輝ある自由と独立とは、その民族自らが決起して、自らの力をもって闘い取られたものでなければならない。日本軍はインド兵諸君が自ら進んで祖国の解放と独立の闘いのために忠誠を近い、INAに参加する者を日本軍捕虜の扱いを停止し、諸君の闘争の自由を認め、また全面的支援を与えんとするものである」

そう宣言すると全インド兵は総立ちになって狂喜歓呼した。40分にわたる大演説は、INAにとって歴史的契機になると同時に、インド独立運動史に残る歴史的な宣言になったという。



公園に集合したインド兵の光景

その後、INAは戦時下のベルリンから来日を果たしたインド独立の英雄チャンドラ・ボースが全軍を率いるリーダーとして登場し、更に規模及び領土（アンダマン？諸島）を所有するINA=インド国民軍として成長し、日本軍と歩を同一にとり、母国インパール及びアキャブ戦線で祖国独立を旗印に掲げ、犠牲的な戦いを英軍に挑むのである。

●（９）スバス・チャンドラ・ボース（Subhas Chandra Bos）

1897年にインド（当時はイギリス領インド帝国）のオリッサに生まれ、カルカッタ（現在のコルカタ）の大学を卒業、両親の希望でケンブリッジに留学したが、1921年にマハトマ・ガンディー指導の反英非協力運動に身を投じた。

1924年にカルカッタ市執行部に選出されるも、逮捕・投獄されビルマのマンダレーに流される。釈放後の1930年にはカルカッタ市長に選出されたが、イギリスの手により免職された。その後も即時独立を求めるインド国民会議諸派の左派、急進派として活躍し、1937年と1939年には国民会議派議長を務めた。



ネタージ(ヒンズー名)=スバス・チャンドラ・ボース（Subhas Chandra Bose）

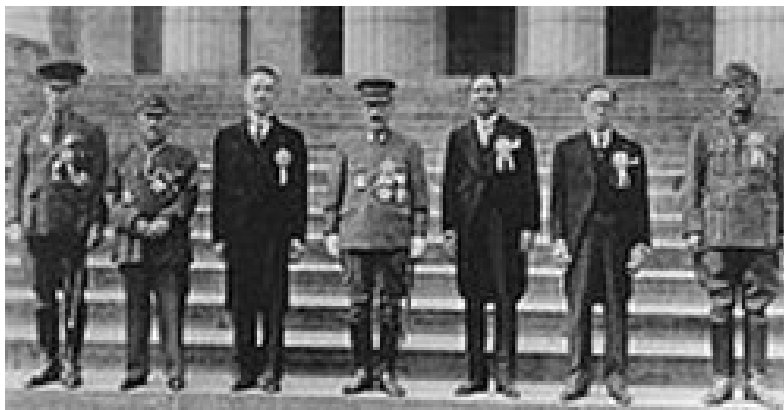
現在インドの国会議事堂の正面にはチャンドラ・ボース、右にはガンディー、左にはネールの肖像画が掲げられている。インドでは最も人気の高い政治家である。また現在もコルカタにはボースがインドを脱出する直前まで住んでいた邸宅があり、記念館となっている。私が会った在日インド人で彼の名を知らぬ人は誰一人いなかった。

● (10) スバス・チャンドラ・ボースの人柄

当時の山口高商を卒業した陸軍中野学校出身者である国塚氏（旧陸軍中尉）もF機関に所属されており、以前、神戸市に在住されていた。

インド独立義勇軍の創立以前から当時通訳兼インド側の代表として日本インド両国の橋渡しに多大な貢献をされた人物です。彼がスバス・チャンドラ・ボースから受けた印象は次の通りである。

『日本の政治家を見た我々は全く想像がつかぬものがあつた。身を持すること、極めて厳であり、生活もいたって質素で、一流の大政治家、公人としては最も質素であつただろう。服はカーキ色の軍服数着のみ、…食事はお客をせぬ以上、印度国民軍兵食と同じ材料をとりよせ、これを食べた。…彼はいつも最高の料理をみごとなマナーで、最高の料理を食べるかのように、この粗末な兵食を平らげるのを見て、私は感心した。…この祖国愛は、彼の六尺近い雄体から滾々と湧きだす精力によってささえられて、いっさいのものを焼き尽くさずにはいられないような感情となつて、ほとぼしった。…



1943 年大東亜会議の各国首脳

…インド国民軍訓練所の下級将校20名に近い教育のために、明日七時半に飛行機でイポーへ出発しペナンに向かう予定があつても、…ここ数日は連日睡眠三、四時間というのに、朝二時に起床し、出発するまでに、わずか二十名の教育のために行こうとする。自分の疲れもわすれて、まったく頭の下がる思いであつた。…

…ボースという人は、他人に対してはきわめて寛であり、挙措温雅、会う人はみな、春風に接する思いがしたが、しかし、ひとたび、ことインドの面目に関することとなると、極めて荘重で、その毅然たる態度はみごとであつた。

当時の戦勝軍たる日本軍に対しても、自分でそうと信じたことは、一步も譲らなかつた。…

…国塚中尉、いいか。私は仮政府とはいえ、印度政府の元首である。しかし、彼、土肥原大將は、現地の一軍司令官にすぎない。私が先に行くと、東亜の印度人はなんと言うだろうか。ああ、やっぱりポーズは、日本の傀儡だ。日本の大將に頭が上がらない。私はこんなことで、私の政府の權威をそこねたくない。私は、印度の名誉を守らなくてはならない。

『我々が、日本軍からお世話になっているということと、私が先に儀礼訪問するということは、まったく別のことなのだ。』

● (11) 自由インド仮政府の樹立

1943年（昭18）10月21日ついに全インド人待望のうちに、自由インド仮政府が樹立された。

その樹立式がシンガポールの最大の劇場であった『大東亜劇場』で東亜各国の要人を迎えて挙行された。

インド仮政府主席として、この仮政府成立の意義と将来計画について、スバス・チャンドラ・ポーズは、実は一時間半にわたる大宣誓をしたのである。カーキー色の軍服に、堂々たる体躯をつつんだポーズ氏の声が低く静かにマイクロフォンを通じて流れたとき、大聴衆は息を吞んで聞き入ったと言われている。その宣誓の一部を紹介する。

『予、スバス・チャンドラ・ポーズは、神の名において、ここインド、三億八千万人の同胞を解放せんことを誓う。予は、予の生涯、最後の息を引き取るまで、この神聖なる独立開放の戦いを誓う。』

『予は、つねにインドのしもべとして、インド自由保全のため、予の血の最後の一滴までささげんことを誓う。』

後述している通り、彼は日本が敗戦した直後、台湾から我が軍の爆撃機でソ連に向ったところ、飛行機事故で死亡するのであるが、生前の直前まで、ポーズはその宣言を全うするのである。

凡人以下の私ではあるが、世界の政治家を少々見たり、書物を読んできた。その狭義な知識の中ではあるが、彼、ポーズ氏の見識、資質及びインド国民を愛する気持ちなどから判断すると、彼は世界第一級の政治家であったと思う。

失礼であるが、当時の東亜各国を代表する政治家の誰よりも、明らかに優れていたと断言できる。

● (12) インド独立と日・印（インド）との友好

日本及び藤原機関とインド国民軍INAの共同した戦いは紙面の都合で省略するが、シンガポール攻略後、日本軍と手を携え、ビルマから母国インドのインパール及びア

キャブなどへ進撃するのである。この進軍の目的は達せなかったが、このINAが戦後、インド独立の原動力となり、ついに1947年8月15日に独立したのである。

このINAを日本が支援し結成されたことが、現在に至っても日・印の固い絆になっている。勿論、現下に於ける日・印間の事業展開及び取引は双方の利益追求もあり、親しいからといって、日本側がそれらを自側へ有利に展開できるものではないが、インドが親日国であることは国家間の友邦および事業などの入り口に入り易い他、信頼と言う人間関係が維持されている点は重要な事と思う次第である。

ジャーナリストの井上和彦はこの日・印の絆に関して、次を記しておられるので紹介する。井上によると、1998年1月20日靖国神社に元インド国民軍大尉でインド国民軍全国在郷軍人会代表を務めた全インドINA事務局長のS. S. ヤダバ大尉は以下を記している。

われわれインド国民軍将兵は、インドを解放するためにともに戦った戦友としてインパール、コヒマの戦場に散華した日本帝国陸軍将兵に対して、もっとも深甚なる敬意を表します。インド国民は大義のために生命をささげた勇敢な日本将兵に対する恩義を、末代にいたるまで決して忘れません。われわれはこの勇士たちの霊を慰め、ご冥福をお祈り申し上げます

(原文) : “We the members of the Indian National Army pay our highest and most revered tributes to our comrades-in-arms members of the Japanese Imperial Army who laid down their lives on the battlefields of Imphal and Kohima for the liberation of India. The Indian nation will ever remain grateful to valiant martyrs of Japan and we pray for eternal peace of their soul.

7. インドネシア独立と陸軍中野学校

● (1) インドネシアの独立

先の大戦初頭、日本軍はインドネシアに第十六軍を派遣させた。この軍の司令部には中野学校出身者11名が配属されており、インドネシアをオランダから解放した後、指令官である今村中将は民政に近い政体を敷いたので、インドネシアの民衆は大変に日本軍を信頼し自国の軍隊のように接した。

戦局が不利になった頃、新たに情報要員、インドネシア防衛義勇軍の指導員として、

中野学校出身者が少なからず追加投入された。この防衛義勇軍の編成及び訓練に果たした中野学校出身者の業績が、その後のインドネシア独立のための大いなる推進力になったのである。



日本人教官による訓練光景

一例を挙げると、インドネシアの祖国防衛義勇軍（Tentara Pembela Tanah Air＝PETA）は戦時中の1943年10月、日本軍の協力の基で結成された組織であり、基礎となったタンゲラ青年道場であった。この道場は戦時中に中野学校の出身者達によって創立され組織であって、この隊長が中野学校2期生の柳川宗成中尉であった。このPETAが1945年8月15日、今次大戦終了後、このPETA出身のインドネシア人がオランダと独立戦争で中心的な活躍をしたのである。インドネシアが独立後、2代目大統領、スハルトは柳川元中尉をインドネシアに招聘したので、柳川氏は1964年（昭和39年）、家族と共にジャカルタに移住し、1986年（昭和61年）に没されている。インドネシア独立には日本軍の中野学校出身者が大きな役割を果たしていたが、それらは紙面の都合で割愛させて頂く。

8. 陸軍中野学校卒業生のその他の活動

● （1）ソ連に不法抑留された旧日本軍人の待遇改善運動

1945年8月9日ソ連軍は日・ソ間で締結していた中立条約（不可侵条約）を一方的に破棄し、日本軍が弱体化した満州などに侵攻してきた。終戦後、不当にも抑留された日本軍将兵は約70万人にも及んだ。ソ連、極寒地での厳しい労働と不十分な食糧供与などで、約五万人の尊い命を落とし、一万一千人ものが未帰還になっている。

日本人抑留者に対するジュネーブ条約で禁止している過酷な労働を十年近く課したのである。抑留者に対する待遇は誠に劣悪で、給養面では極端な栄養不足のために多くが羅病し尊い命を失った。

更に衣服、医療面でも度を越した処遇であり、加えて思想教育も悪辣であり、従わない日本人を日本人が制裁を加えるようにした。

このような状況下でソ連側の不法抑留と非人道的な処遇に抵抗して、1955年（昭和30年）、九百名の日本人抑留者が結束して待遇改善運動を巻き起こした。所謂、世にいうハバロフスク事件である。これを契機にして、流石のソ連も少なからずの待遇を改善せざるを得ない状況に押しやられた。

この抵抗運動を指導したのが抑留者の中にいた中野学校の出身者であった。

● （2）戦後の中野学校出身者

陸軍中野学校出身者の中には戦後、政界、実業界など各界に名を連ねた有名人も少なからずいたようであると言われているが、中野学校卒業生は秘匿を旨としていたことなどから、その出身を明らかにしなかったこともあり、戦後の彼らの航跡は余り知られていない。しかし、その中で一人の中野学校出身者が明らかにされていたので紹介する

中部地方有数のスーパーマーケット「バロー」の創設者である伊藤喜美氏は陸軍中野学校の出身者である。

伊藤氏は1943年、法政大学を仮卒業し学徒出陣で召集され、豊橋の陸軍予備士官学校へ入校後、推薦され陸軍中野学校に入学されている。

戦後、伊藤氏は中野学校で学んだ「誠」を思い出し、全ての営業活動は地域社会に貢献するためであり、店はお客様のためにある。これが商人の道であると考えスーパーマーケット（主婦の店）の経営に社員と一丸となり取組み現在のバロー・ホールディングを起ち上げた。

因みにバロー（Valor）とは戦場に於ける「勇気」「勇敢さ」「武勇」を意味している。これからも中野学校出身者が名付けたと推察できる。伊藤氏は「当時の仲間の多くが死んだ。あいつらがもし生きておれば、俺以上のことをやっただろう」と口癖に言っていた。

※バロー・ホールディング 資本金（約119億円、2016年）。売上高（連結：5243億円、2018年3月）。

営業利益（135億円、2018年3月）

9. むすび

「愚者は経験から学び賢者は歴史から学ぶ」

これはオットー・フォン・ビスマルク（Otto Von Bismarck 1897-1975、プロイセンおよびドイツの政治家）の諺である。私はこの諺の歴史から学ぶとは「他人の航跡から学ぶ」ことも意味していると解釈している。

今回は主に、アジア解放に関与された中野学校出身者に関して記述しているが、遊撃隊幹部として卒業した者も、同様に次に述べる中野学校で学んだ精神及び内容を身に秘めて最後まであらゆる方法を駆使して活動したのである。

今回、私は陸軍中野学校の実体を調査したところ、自己能力の僅少に加えて、この学校は秘匿を旨としていたので、詳細な実態を十分に把握することは不可能であった。しかし、何を目的にして学生を育てたかは一応理解することが出来た。当時の古い言葉で「諜報」「宣伝」「防諜」なども中野学校で「科学的」に教授されていた。現在風に言えば、目的を達成するために、時下の状況・環境などを把握・分析し、目的を達成するための目標との本質的な乖離及び課題を見つけ出し、これを解決し目的を達成するための計画を策定し、相手又は関係者にその計画の必要部分を説明し、組織的に実行することになる。他方、最近の企業は企業内秘匿の漏洩を防止する制御策も死活課題として構築している。

中野学校ではこの他に、人間として重要な精神=哲学も学校の風土として学生が自然と体得する工夫が至るところで工夫されていた。その校風とも言えるテーゼが「誠」であった。つまり「公に奉ずる」ことであった。この「誠」は中野学校を著している多くの書物の中に明記されていた。

このように理解してくると、陸軍中野学校は単なるスパイ養成学校ではなく、目的を達成するための改革戦士または革新の旗手、現在風に言えば「優秀な管理者と人物」を養成する機関であったと判断される。

従って、記述しているようにビルマ、インド、インドネシアなどに於いて、中野学校出身者は命をかけて、あの様に民族の独立と我が国の国益のために活動し功績を残したと判断しても過言ではない。

この陸軍中野学校出身者が示した史実の航跡を学ぶことは、特に我々のように海外で相手国と自国との国益（国又は企業）を目的として活動する者に対する道標になると思う次第である。

前述した通り、この中野学校では遊撃隊幹部養成も実施されており、小野田少尉のようにルバング等で約30年間に渡り、目的のために遊撃戦を繰り返し1974年に帰還された。終戦後の戦闘で現地の人を殺傷したことは犯罪であると言う評論家もいる。確かにそれはそうである。しかし、小野田さんへは戦闘行為を中止する命令を国家から受けていない状態であったので仕方がないと思われる。つまり、戦争時と平時とは状況及び条件が異なっている。従ってフィリピン政府は彼の非を問わず、返って英雄扱的な待遇を与えたのである。

この戦争を企業の事業と置き換えると小野田少尉の目的のための活動は理解されると思う。

その後、彼はブラジルに移住、苦心し灼熱の原野を開拓し大牧場を造り経営に成功した。そして経済的な余裕も得たので1984年（昭和59年）、62歳のとき、小中学生対象に自然塾を創設し、その後福島県の山中にキャンプ場を造り、野外活動を通じて子供達に「生きる力」を教えたのである。つまり、彼は最後に「公に奉ずる」活動、即ち「誠」を貫いたのである。



ブラジル小野田牧場で馬に跨る小野田さん
後方の木看板には HIROO ONODA と書かれている

2020年5月3日
高松重信

参考文献

- 畠山清行著『秘録陸軍中野学校』1-700頁、新潮文庫、2003年8月
- 加藤正雄著『陸軍中野学校』1-249頁、光人社NF文庫、2014年7月
- 日下部一著『陸軍中野学校実録』1-247頁、株式会社ベストブック、2015年7月
- 国塚一乗著『印度洋にかかる虹』1-239頁、光文社、1958年12月
- 国塚一乗著『インパールを超えて』1-253頁、講談社、1995年6月
- 総山孝雄著『スマトラの夜明け』1-233頁、講談社、1981年11月
- 泉谷達郎著『ビルマ独立秘史』1-238頁、徳間書店、1967年5月
- 大田周二著『パゴダの国のサムライ』1-247頁、同朋舎、1997年8月

筆者略歴

たかまつしげのぶ
高松重信



1942年生まれ。1967年国鉄入社、本社及び松任工場長、吹田工場長などを経て、民間会社の海外鉄道車両関係に従事。台湾に約5年6か月・電車の現地生産・責任者として駐在。

ミャンマーとの関係は1982年国鉄からビルマ国鉄へ派遣、いらい現在に至るまでミャンマー鉄道省運輸省及び同国鉄へ顧問的な指導。鉄道に関する論文発表多数。

元国土交通省ミャンマー鉄道改善WGのメンバー。2022年8月外務大臣表彰受賞。現(一社)日本ミャンマー友好協会(副会長)。現JICAミャンマー鉄道政策&技術顧問。

日緬ライブラリー・パダウ 9

嘗てのビルマ戦線で戦った日本将兵を想う
＜その 8＞—アジア解放と陸軍中野学校—

高松重信 著

2025年 4 月15日 発行

発行者：一般社団法人日本ミャンマー友好協会

〒160-0012

東京都新宿区南元町13-3-504 ライオンズマンション信濃町 5 F

TEL 03-6380-0409

ISBN 978-4-911475-08-9 C1810

©高松重信 2025